

Masako Yasuki

Chaos from Order – fullness of time

KYOTO ba

Fullness of Time – obliterated ground in the south
インペラ・油彩 470cm × 330cm 2019-2020

‘Chaos from Order – fullness of time’

安喜 万佐子 カオス・フロム・オーダー <時の庫>

2020年10月17日（土）～12月6日（日）

開館：12:00～19:00 月・火曜休館 (closed Monday, Tuesday)

京都場 KYOTO ba

604-8412 京都府京都市中京区西ノ京南聖町6-5
6-5 Nansei-cho Nakagyo-ku Kyoto Japan 604-8412
TEL. 090-9208-1737 e-mail. info@kyoto-ba.jp
HP. <http://kyoto-ba.jp/>

【同時開催】

安喜 万佐子展

‘Order from Chaos – future strata’

オーダー・フロム・カオス <明日の地層>

2020年10月27日（火）～11月14日（土）

galerie 16

601-0021 京都府京都市山科区山科西谷14番地101号京町394, 4F
TEL. 075-751-9238 e-mail. info@art16.net
HP. www.art16.net/

安喜万佐子の絵画を「体験」するということ

「画類の比類ない美とその美が惹起する共感の念は、私達を胸苦しい判断停止に委ねるのである。」
安喜万佐子の作品空間を彷徨いながら、ジョルジョ・パダイユの『ラスコーの壁画』の中の言葉を思い出す。

彼女の作品を、わたしたちに染み付いた一般的な絵画を見る作法、すなわち指されたイメージを追う見方で向き合おうとしても、その本質には辿り着けない。

制作する自分自身を、現代の時間感覚や身体習慣による思考から乖離させようとして持ち込んだ西洋の伝統テンペラと日本古来の岩絵具や金箔を使った手法。世界の様々な地域に向き体を屈めて街を掃き出すフロッターージュ。シュールレアリスムの技法でもあるが、イメージから距離を置き、身体で世界と触れるための方法でもある。

様々な極から世界をみる仕組みにより安喜絵画は生成されている。しかし、その方法の一つ一つの意味だけにどられてはいけない。それらの全てを少しずつずらしながら結合させることで立ち上がっているのが安喜作品なのである。

そこに、わたしたち観る側が身体を伴って関わった時、パダイユの言うところの「共感の念」とともに、習慣的思考が停止し、世界の姿が開示する。

わたしたちに必要なのは、「ラスコー洞窟」を発見してしまった子どものような眼差しと所作なのかもしれない。

安喜万佐子の作品は、展示空間の中の一連の運動の中で立ち上がる。

人類が直面する現代の様々な問題が露呈した2020年。全てがイメージに回収されて行くかのような今だからこそ、本展を、是非とも現場で「体験」していただきたい。人と世界の「機」として、身体を伴って向き合うべき「絵画」を。

みなさまのご高覧を、お待ちしております。

京都場

絵の前に立つ。ゆっくりと前へ。そして後ろへ。なんどか、そんなふうに、手探のように、近づいたり、遠のいたりしているとき、ふと、ここだと感じる位置がある。ここだ、と身体が言っている。いや、観ている自分の身体ではない。絵が、絵の距離が、そう呟いているのだ。

その距離が、私に、絵を触れさせる。絵を観ているのだが、その眼は、視覚を通して絵に触れている。

眼で触る。安喜万佐子の絵画は、いつも、観る者に眼で触ることを要求している。というより、いやおうなく、その絵の前に立つと、眼で触る欲へとわれわれを誘うのだ。

触覚の働きは、人間が、人と人の間に生まれる関係を生きることによって人間でありうるという、その関係性へ働きかける最も初源的なありかたである。このことを、われわれは、日頃は忘れていたが、それを知ったとき、しみじみと考えずにはいられないだろう。これは安喜だけに限ったことではない。林檎の絵を描いている画家も、その林檎の形と色を通して、林檎という存在の初源的な美しさに促された自分の気持を掻きたいと願っている。

安喜万佐子は、林檎ではなく、人が生きる「場」を選んだ。「場」は林檎のように形を成していない。それは「時」と「土地」(大地といってもいい)という変数によって刻々姿を現わす函数の塊である。函数を絵画にする、あるいは、絵画を函数にする。このとき、画家の内部では、既成の「絵画」の伝統は、ゼロの位置に引き戻され、遠近法も明暗法も疑われ、日本画洋画の類型は再編され、「絵」を描くという「初源の時＝地点」へその全身が向かう。そして、人間が人間であるために働かせた行為＝「触覚」への応答が、いやおうなく求められる。こうして、絵を作る動きの一つひとつは、その「初源」への想いに満たされる。

初源に触れる。それは掛け替えのない感動である。だが、それは、網膜に薄く積もった初雪のように、僅かな熱で溶けてしまう。日常の、避けては通れぬ習慣化した行動が、掛け替えのない雪を無残にしかも平然と溶かして行く。「絵」を制作するということは、その溶けて行く雪を掻き留めることにはかならない。茹いても消え茹いても消えようとする「網膜の初雪」を追いつけて、安喜万佐子は、絵を描いて行く。

安喜万佐子の「絵」はだから、生きている。そんな生き物にわれわれは、やはりみずからの身体を動かし、その息遣いを感じとる位置を探していかなければならない。この絵との距離の測りかたは、人はいまをいかに生きるべきか、という問いへの一つの示唆を運んで来る。 2020年 初秋



安喜万佐子 | MASAKO YASUKI www1.kcn.ne.jp/~yasuki/

天然鉱物や顔料を使ったテンペラから金箔銀箔等、洋の東西を跨ぎながら近代以前の手法を使い、緻密な筆致と身体的ダイナミズムを備える大判の絵画を描き続ける。「風景」から照射される人間の身体や意識、記憶などを道徳的に浮かびあがらせる安喜の作品は、全て本人が訪れたことのある「実在する土地」に纏わり制作され、その「風景」は「自然」「社会」「環境」と呼び喚び可能なものの総称として捉えられ、普遍的な問題を提起する。

Masako Yasuki paints 'landscapes', but not landscapes in the sense used in modern painting. Through exposure to the landscapes she represents, her paintings give 'memory', 'history', 'environment' and the idea of 'landscape' different perspectives. Regarding painting materials, Yasuki selects from, among others, the tempera of medieval European paintings, natural pigments of old oriental paintings, *kin-paku* (gold leaf) and *gin-paku* (silver leaf). By becoming accustomed with these inconvenient and old-fashioned materials, she intends to open a path of communication with the ancient arts.

1994 京都精華大学大学院美術研究科洋画コース修士課程修了
2001 美国エジンバラ芸術大学ゲストアーティスト
2004 米国アーモスト大学ゲストアーティスト
2015 米国スミス大学准研究員 (文化庁新進芸術家海外派遣)
2020 英国ロンドン芸術大学ゲストアーティスト

1998 / 2001 'VOCA展' 上野の森美術館
2004 'Confronting Tradition' Smith College美術館 (米国)
2005 'City-net Asia' ソウル市美術館
2014 モスクワビエンナーレ特別プログラム
2018 '日本の現代美術とは' RUARTS GALLERY (モスクワ)

他、国内外で個展・グループ展多数

新型コロナウイルス感染予防の対応として、入館時はマスクをご着用ください。入館時には体温測定の実施、人数制限をさせていただきます。
受付付近などには消毒液アルコールを設置し、館内でもアルコール消毒を行っております。



京都府立美術館
904-0412 京都府京都市中京区西ノ京 西ノ京4-6-6
9-6 Nishio-cho, Nakagyo-ku Kyoto 604-0412
TEL 090-9258-1777 e-mail info@kyoto-museum.jp
HP: <http://kyoto-museum.jp/>